

科学館めぐり

高岡市鋳物資料館(富山県高岡市)

文責：富山県立大学 鈴木真由美
(2023年12月訪問)

高岡市鋳物資料館は、高岡鋳物発祥の地である金屋町に2007(平成19)年、古民家(旧高守家)と鋳物工場跡地に開館し、2013(平成25)年に隣接する古民家(旧若野家)の一部を改修した現在の資料館に拡張しています。金屋町は「さまのこ」と呼ばれる千本格子の町屋と石畳が美しい町で、2012(平成24)年に鋳物師町として全国で初めて国の重要伝統的建造物保存地区に選定されています。資料館は、金屋本町の信号から家並み通りを金屋緑地公園側に進んでほどなく、左手に見えてきます(図1)。



図1 高岡市鋳物資料館と家並み通りの石畳。



図2 にしん釜(鉄製)。

入口を入るとすぐ右手に無料の第2・第3展示室があり、たたら踏みや箱鞆の体験ができます(たたら踏み体験は2023年12月現在、休止中)。その他、コークス溶解炉、塩釜やにしん釜(図2)、銅鏡とその鋳型、鋳物用具、高岡開町400年記念事業で行われた「たたら吹きによる鋳造の再現」で鋳造された銀鯰尾形兜の鋳型と鋳物(図3)(なお、兜の完成品は第1展示室に展示されています)など、様々な資料が展示されています。また、「たたら吹き再現」の様子はビデオで観ることができます。奥の第1展示室へのアプローチとなる石畳の通路の壁には、鋳型製作に使う工具や鑿(たがね)で十二支が彫られた年賀状用の真鍮板、鋳物製の農具(犁先)などが展示されています。

奥には受付と有料の第1展示室があります。小さなスペースですが、高岡銅器の情報がぎっしりと詰まっています。高岡銅器の伝統工法に関する約15分のビデオによる説明に加え、タイミングが合えば、職員の方から展示品についてじっくりとお話を伺えます。常設の展示物の見所としては、何と言っても、日本遺産、登録有形民族文化財に指定された沢山の高岡鋳物の製作用具や製品です。一部変形するまでに大事に、そして丁寧に使いこまれた様々な工具(図4)からは、当時の職人の思いが伝わってくるようです。その他、高岡銅器の伝統的な鋳造法(焼型鋳造法、双型鋳造法、蛸型鋳造法)の説明や、実際の鋳型や鋳物の製作用具(工具)作品等も、間



図3 銀鯰尾形兜の鋳型と鋳物。



図4 鋳物の製作用具(登録有形民族文化財)。
左上：リスワ、右：丸こて、左下：なめくり

近で見ることができます。高岡銅器は鮮やかで美しい発色でも知られていますが、この資料館では様々な伝統技法で着色された銅板が展示されています(図5)。展示室の奥には高岡市出身で国の重要無形文化財(彫金)保持者(人間国宝)である金森映井智氏かなもりえい ちと大澤光民氏おおさわみつみんのコーナーが設けられ、同氏らの作品や多種多様な型や模様型などの彫金工具(図6, 7)が展示されています。また、展示室中央エリアでは、半年毎に様々な特別展示が企画されています。

高岡の铸物づくりは、初代加賀藩主で前田家二代当主である、越中の高岡城に隠居していた前田利長公が、1611(慶長

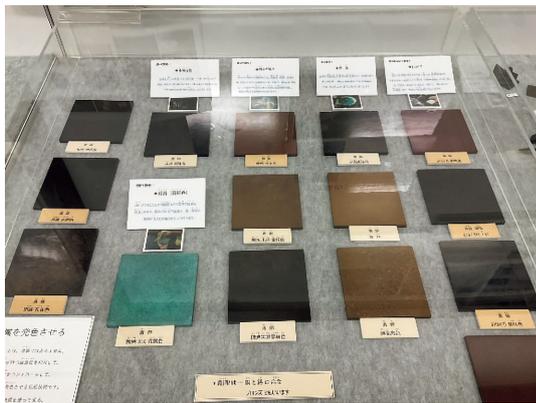


図5 銅の発色.



図6 様々な型(たがね).

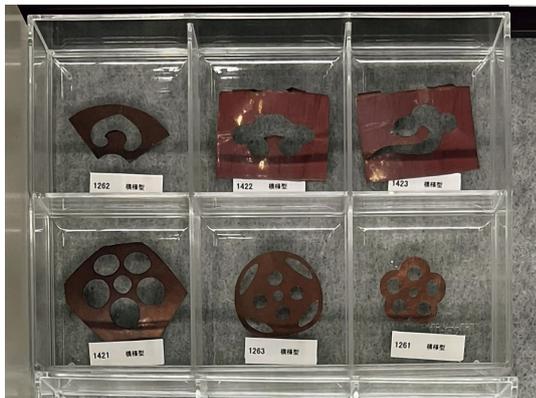


図7 彫金用模様型.

16)年に開町間もない城下町高岡の産業振興策の一つとして、加賀藩領内から7人の铸物師を金屋町に呼び寄せて铸物場を開設したのが始まりです。高岡铸物は土地の他、税金や労役の免除といった特権を与えられ、利長をはじめとする歴代加賀藩主の保護を受けて発展していきました。当初は鍋や釜といった日用品や農具などの鉄铸物が中心に作られていましたが、江戸中期頃には銅铸物が作られるようになります。なお、江戸時代の中頃に活躍した北前船では、高岡からにしん釜(図2 ニシンが原料の肥料(ニシンかす)作り)に使われる大型の鉄釜)や、仏具や美術銅器などが運ばれました。幕末を経て、明治期には铸物技術は更に発展し、装飾・観賞性の高い花器などの銅铸物製品が作られ、国内外に知られるようになります。1878(明治11)年のパリ万博に出品された二代目横山彌左衛門よこやま やしざゑもんによる「武人文大香炉」は、現代では再現が難しいほどの精緻な技巧で高い評価を受けており、同市にある高岡市美術館に收藏されています(なお、資料館では受付横の資料棚にある書籍で、表と裏両側の写真を見ることができます)。太平洋戦争中は軍事使用のため金属供出令が出され、高岡の銅器産業は大きな打撃を受けますが、戦後はそれまでの铸物技術を基に、アルミニウムを用いた鍋・釜などの日用品の製造が始まります。その後、銅器産業も復興していく中、これらの技術は着実に受け継がれ、1975(昭和50)年に伝統的工芸品として国の第一次産地指定を受けています。そして現在、素材を“銅”に限定しない“新しい高岡銅器”の形がこの地から模索・発信されており、高岡銅器は今もなお進化を続けています(1)-(3)。

科学館で見つけた金属材料!“重さ 100 kg の鰐口(わにぐち)”

第1展示室で目を惹く作品の一つが、鰐口わにぐち(図8)です。鰐口とは、神社や仏閣の堂前の軒先に吊るし、参拝者が網を振って打ち鳴らす金属製の梵具です。初期高岡铸物の鉄製品の



図8 鰐口(高岡市指定文化財).

中で、製作年代が1696(元禄9)年と判明している最も古い作品で、1981(昭和56)年に高岡市指定文化財に指定されています。重量は100kgを超える大型铸件でありながら、上側に桐紋、中央部に16弁の菊花を象った「つき座」が美しい作品です。また、湯口が1ヵ所で製造されているなど、当時の高岡铸件の技術水準の高さが窺える作品です。

資料館がある家並み通りには、铸件の製作体験が出来る工房やアクセサリ作りが体験できるお店などがあります。また、様々な銅像の他、石畳のところどころにはハート型や星型のかわいらしい銅片が埋め込まれていますので、これらを探しながら散策するのもお勧めです。資料館の裏の金屋緑地公園には铸件発祥の碑がありますので、そちらも必見。また、すぐ近くの千保川に架かる鳳鳴橋には優雅に羽を広げた金色の鳳凰像が佇み、道行く人々を見守っています。国登録有形文化財に指定された旧南部铸造所(キューポラと煙突)もすぐそばにありますので、是非足をお運びください。もちろん、高岡の铸造技術の粋を集めて作られ、歌人と謝野晶子に「鎌倉大仏より一段と美男」と称えられたとされる⁽⁴⁾高岡大仏もお忘れなく！

文 献

- (1) 令和2年度版 高岡特産産業のうごき：高岡市 産業振興部 産業企画課，2022(令和4)年3月発行，1-8。
(<https://www.city.takaoka.toyama.jp/joho/shise/opendata/documents/tokusansangyo.pdf>：2023年12月26日閲覧)
- (2) 長柄毅一：化学と教育，**64**(2016)，518-519。
- (3) 大熊敏之：“高岡銅器誕生から明治期を経て今日まで”，「世界のなかの高岡銅器 未来への歩みに向けて」平成26年度 富山大学特別公開フォーラム報告(2014)，5-8。
(<http://www.acc.u-toyama.ac.jp/dl/forram26/01.pdf>：2023年12月26日閲覧)
- (4) 高岡市観光ポータルサイト「たかおかの道しるべ」，トピックス，高岡の大仏さま
(<https://www.takaoka.or.jp/news/archives/5451>：2023年12月26日閲覧)。
(2023年12月26日受理)[doi:10.2320/materia.63.125]

高岡市铸件資料館へのアクセス

(〒933-0841 富山県高岡市金屋町1-5)

*電車：あいの里とやま鉄道およびJR・高岡駅より 徒歩約20分

万葉線・末広町あるいは片原町停留場より 徒歩約12分

*バス：加越能バス「金屋」下車 徒歩約2分

*自動車・タクシー：あいの里とやま鉄道およびJR・高岡駅より 約5分

JR新高岡駅より 約10分

能越自動車道 高岡ICより 約10分

北陸自動車道 高岡砺波スマートICより 約25分

※金屋緑地公園駐車場が無料で利用できます。(徒歩約2分)

URL: <https://www.city.takaoka.toyama.jp/bunkazai/kanko/bunka/shisetsu/imonon.html>



※この記事が執筆されてまもなくの2024年1月1日に、石川県能登地方を震源とする大規模な地震により、石川県、富山県、新潟県を中心に大きな被害が発生しました。

記事でご紹介した铸件資料館のある高岡市もまた、被害を受けました。

犠牲となられた方々に謹んでお悔やみを申し上げますとともに、被災された皆様とその関係の方々にも心よりお見舞い申し上げます。

～会報編集委員会～